

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

隷辱の騎士
ルリア
墮悦の盟約

小説 上田ながの

挿絵 いちごまあく

第一章	劍を握るは、護るべき者の為に	006
第二章	己さえも捨てて	036
第三章	たとえ穢れたとしても	069
第四章	軋む心	093
第五章	剥離する心と身体	129
第六章	騎士としての死	171
最終章	信じるものの為に	224

登場人物紹介

Characters



ルリア=ミスティア

一人で数千の兵に匹敵するといわれる力を持つ契約の騎士。アゼリアと契約を交わし、国を救うために戦うクールな女性。



アゼリア=ギアガード

ギアガード国の王女。ルリアと契約を結んでおり主従関係にある。照れ隠しで少し自分に正直になれないところも。

ゲベルス

ギアガードの宰相。戦況把握の為にルリアの元を訪れる。

バルザーク=ガレリア

現在ギアガードに攻め込みつつあるガレリア帝国の第三帝位継承者。

聞いた途端、白い肌が耳まで真っ赤に染まった。

「まあそういうわけだよ。理解していなかったとはいえ、君もなかなか勇氣があるねえ」

男がニヤニヤと笑う。ルリアはそんな男の笑みにも気付かず、完全に硬直していた。部屋の中で突っ立ったまま、拳を握る。

(ぜ、全然違う……は、話が違いますよ姫様……)

一瞬呆然としてしまう。そんなルリアの様子を観察しながら、男は徐おもむろにズボンを脱ぐ。あまりに自然な行為であり、一瞬彼が何をしているのか気付けなかったが、気付いた瞬間には「な、何をしているっ!」と思わず怒鳴っていた。

「何って、説明した通りだ。ここではこれが自然なんだよ。ただ、勿論素人である君には手は出さん。この主人にも世話になってるしな。だから、どうだ。せめて口でやってくれないか?」

語りながら男は下着まで取り去る。既に半勃ちになった赤黒い肉棒が女騎士の視界に映った。ビクビクと痙攣するように蠢いている。初めて見るソレに、一瞬目が釘付けになってしまった。

(あ、あれが……)

ゴクリッと唾を飲む。

『ミステリア様って見たことないんですか? いや、そんなところがまた素敵』

『とっっても凄いですよ』

王城でからかうように、男の話をしてきた侍女達を思い出す。その話の中で、口でするといふことの意味も聞いていた。あの時は冗談にすぎないと思っていたのだが……。

男と女がする行為の意味を知らぬ程、ルリアは幼くはない。男がどんな欲望を持っているかも知っている。ただ、知っているからといって実行できるわけでもなかった。

「そ、そのようなことは……」

いきなり口でしろなどと言われてもできるわけがない。すると男はチッチッと舌を鳴らした。

「勿論ただでとはいわんさ。口でしてくれば、大切な情報を教えてやるよ。興味があるんだろ？ それとも君はただで情報が聞けると思っていたのか？」

「それは……」

虫の良すぎる考えであることはルリアにも分かる。とはいえ、口でするなど……。

『我が国を頼む』

躊躇の中、何故か王の言葉を思い出す。国を憂いながらも、家臣でしかない自分を心配してくれていた王の言葉を。ぐっと唾を飲み込み、そして心に決めた言葉を発した。

「わ、分かりました……そ、それくらいでしたら……」

「なかなか聞き訳がいいな。そんなに機密を聞きたいのか？ 変わった奴だな」

「そんっ——そんなことはありません。た、ただ少し興味があるだけですから……」

ここで疑われては元も子もない。慌ててルリアは首を振ると、誤魔化すように男の前に

しゃがみ込んだ。

(う、く、臭い……)

眼前に肉棒が晒される。不気味なまでに膨れ上がった亀頭部から立ち昇る、噎せ返るような臭いが女騎士の鼻をついた。身震いする程の嫌悪感が湧き上がってくる。

まるでそこだけが別の生き物のように蠢いていた。ちよつとした短剣程の大きさはあるだろうか？ ゆっくりと眼前で反り返っていく。肉胴には幾本もの血管が浮かび上がっていた。

「どうすればいいか分かるか？」

「だ、大丈夫……で、す……」

こんなモノを実際に見るのは初めてだったが、必死にルリアは侍女達に無理矢理聞かされた話を思い出す。

『いいですか、あまり力を入れてはいけませんよ。かといって、力を抜きすぎてもいけません。重要なのはバランスです。ミスティア様って器用だから、すぐに上手くできると思いますよ。ああ、でもミスティア様が誰か殿方とそんなことになるなんて、想像したくないですう〜』

『そ、そうか？ って、なんて話をするんだ！』

侍女達との会話を思い出しながら、ルリアは慎重に肉棒を握った。

(あ、熱い……そ、それに硬い……)

燃え上がるような熱気が掌に伝わってくる。握った竿は、剣の柄のように硬かった。ゴクリッと再び喉を鳴らす。

「ぎこちない手付きがなかなかいいな。だが、分かっているとは思いが、触れてるだけでは駄目だぞ、俺は口でしろと言ったんだ」

「わ、分かっている……ます……」

硬くなりながら答え、女騎士は何度も躊躇しつつ、ゆっくり肉先に唇を近付けていった。先端部のワレメが、奉仕を期待して開閉する。その様が何とも不気味だった。情報を得る為とはいえ、敵の前に跪く屈辱に身が震える。

ちゆく……。

やがて唇が先端に触れた。

「いいですか。初めは優しいキスからです。舐めるのはそれから。口に含むのは最後ですよ」

『お、お前……そ、そんなことをしてるのか……。は、破廉恥な……』

不潔としか思えなかったが、何故か耳を離せなかった侍女の話。自分の行為を誤魔化すようにそんなことばかり思い出しながら、チュッチュッと肉先に口付けを繰り返し、やがて女騎士はピンク色の舌を伸ばした。

ちゆく、ちゆくちゆく、ちゆうう……。

「なかなか上手いな。ここがどんな場所か知らなかった割には、なかなか手馴れているじ

やないか。本当はやり慣れてるのかな？」

「そ……んちゅっ……そんなことはない！」

頭上から投げかけられる男の言葉を慌てて否定する。とはいえ、男の言葉通りルリアの奉仕はとても初めてのものとは思えなかった。

確かに全体的なきこちなさは残っている。だが、まるで初めから口奉仕のやり方を知っていたかのように、舌をカリ首に絡ませ、肉筋を舐め上げていた。ぐちゅぐちゅと口の中に唾液を分泌させ、舌先から垂れ流す。涎でヌラヌラと光った肉先を、ジュルッと音を立てて舐め上げた。剣を振るうことと同じく、肉体を使った行為は何でも器用にこなしてしまふ。この時ばかりはそんな自分が恨めしかった。

ちゅばちゅば、くちゅるう……。

舌先でなぞるようにワレメを舐める。

「んくっ！ にがっ！ な、なんだ!？」

突然味覚が痺れるような苦味が伝わってきた。ルリアは反射的に顔を離し、まじまじと自分の唾液でヌラヌラと濡れた肉棒を見つめる。すると、肉先から半透明の液体が分泌されていくのが分かった。

「どうした？ 何を驚いてる？ これは男が感じている証拠だぞ。ほら、気にせず続けるんだ。ふふ、そろそろ君の口も味わってみたいな」

男の口元が下品に歪む。驚く女騎士に、更なる行為を促してきた。この言葉に、一瞬ル

リアの頭の中は真っ白になる。が、すぐに正氣に戻ると、一瞬奥歯をギリッと噛み締めた。
(このような男にいいようにされて……)

一瞬力づくでも話を聞き出してやろうかという考えが浮かぶ。しかし、それはできない。もしここで男を叩きのめしたことが敵にばれた場合、宰相に危機が迫る可能性がある。それでは元も子もない。

女騎士はギリギリと拳を一度握り締めた後、再び肉棒に口付けをした。

先程までとは違う、粘着質のぐじゅつとした感触が伝わってくる。分泌された粘液が、艶やかな唇に纏わりついてきた。震えが起こりそうな程に不味い。

(耐えろ。ここは耐えろ……ギアガードの為なんだ……)

何度も自身の心に言い聞かせながら、リアは口を開き、肉棒を口腔へと導いた。

「んくっ！ ふむっ！ んむうう……」

小さな口がペニスに拡張されていく。ムワツとした生臭さと、苦味が口腔いっぱい広がる。喉奥が塞がれそうな程の太さ。息さえも詰まりそうになる。顎が外れそうな程に辛い。自然と分泌された唾液が、口端からたらりと垂れ流れていった。

肉胴に口腔粘膜が削られる。苦しきから眦に涙が浮かんだ。

「さあ、ここからだぞ。しつかり奉仕してくれよ」

男にもリアが苦しんでいることは分かっているだろう。それを分かった上で、更なる要求を加えてくる。女騎士は命令されるがままの状況に激しい屈辱を感じながら、口腔内

の異物に舌を絡ませていった。

舌を肉茎に絡ませ、ペニスを締め上げる。同時に口を窄め、肉胴を吸った。

じゅず、ちゅずるるる。ぶじゅるう……。

下品な水音が響く。分泌された牡汁が喉奥にまで流れ込んできた。

「んげっ！ んごっ！ げほっげほっ！」

思わず何度も咳き込み、ペニスから顔を離そうとする。が、伸びる男の腕ががっちりとしてルリアの後頭部を押しさえ込んできた。強く頭を押しさえ込まれてしまつては、口腔を肉棒から解放することなどできない。

「まだまだだなあ。こつちも好きにやらせてもらうぞ」

その言葉と同時に、急に突き込みが変化する。拘束したルリアに男は笑いかけると、何の容赦もなく腰を前後に振り始めた。

「んぶっ！ ひぐっ！ と、とまっ！ とまっで！ んげっ！ ふぐっ！ うっうっ！

ふぐうっ！ うげえっ！」

じゅぼっじゅぼっ！ ぶじゅぼおっ！

肉先が喉奥を何度も叩く。肉茎が喉奥に突き込まれると、舌先が龟头部に巻き込まれ、尿道が塞がれた。逆に引き抜かれていくと、唇が外側に捲れ上がり、唾液がだらだらと溢れ出す。顎を伝って垂れ流れた汁が、ポタポタと糸を引きながら床に落ちていった。

（く、くるっし……そ、それに不味い……ふぐっ！ くひっ！ ふごおっ！）



伸ばした腕で男の腰を掴む。必死に突き込まれる肉棒を突き放そうと、女騎士は無意識のうちにもがいていた。契約の騎士としての力も発揮することができない。されるがままに口腔を蹂躪されるしかなかった。その上――

（お、大きさが、ま、増して――んんっ！ い、るっ!）

ストロークのたびに肉胴は一回りも二回りも大きくなっていく。分泌される汁の量も増えていた。半透明だったものは白濁とし始め、口周りを更に穢す。臭みが増し、ビクビクと肉茎は激しく痙攣し始めた。

じゅずぼっじゅずぼっじゅずぼっ！

「なかなかいいぞ。そろそろだ。そろそろイクぞ」

荒い息を吐く男の言葉が耳に届く。一瞬ルリアにはイクという言葉の意味が分からなかった。が、

『いいですか、男の人は最後にですな……』

侍女の言葉を思い出した途端、女騎士は先程にも増して抵抗を激しくする。ペニスを咥えたまま、何度も首を左右に振ろうとした。

「ひ、ひやっ！ く、くひのなかでは、くひのなかふあひやめろっ！」

首を振ることで、破裂しそうな程に膨れ上がった肉亀頭が頬を擦り上げる。粘膜と粘液が混ざりあい、視界がぐらぐらと揺れた。ビクンッと陵辱棒が跳ねる。

「そうか、そんなに射精して欲しいか」

「ひ、ひが、ひが——ふぐうっ！ ほごっ！ ほっほっほっほおっ！」

ブジュボッ！ ブジュボッ！ ブジュボオッ！

より肉棒の動きは激しさを増した。凄まじいばかりの突きに、玩具のようにルリアの顔は前後に揺らされる。女騎士の美しい金髪が宙を舞った。ドレスの胸元が唾液と牡汁が混ざったものに塗れていく。

（こ、こんな、こんな扱いを……んぐっぐっぐっぐうっ！ ふーふーふー）

嫌悪感ばかりが膨れ上がっていく。

「さあ、射精すぞ。しっかり口で受け止めるんだぞ。零したら話はなしだ」

冷酷な宣告。同時に肉棒が燃え上がりそうな程に熱くなり、鉄のように硬くなった。

「ほごっ！」

より大きさが増し、暴れ馬のように肉棒は口腔内で何度も痙攣する。そして——

ドビュッ！ ドビュドビュドビュドビュドビュルルルウウウウッ！

「んぼっ！ ふごっ！ んんんんんんんんんんんん！ うげっ！ ふげえっ！」

射精が始まった。ペニスが震え、ポンプのように汚液を噴出してくる。熱く汚れた陵辱液が、容赦なく女騎士の口腔を穢していった。腐ったような臭いに、激烈な苦味が喉奥を焼く。

（で、射精てる！ け、汚らわしいものが、こんな男のものが……あ、熱い。熱い液が私の口の中に射精てる……）

ドクドクドク。

口腔が牡汁に埋め尽くされる。すぐにでも吐き出したい程の嫌悪感を覚えた。苦味と臭みで嘔吐感すら湧き上がってくる。

「ふう。なかなか良かったぞ。とはいえ、まだ終わったわけじゃない。いいか、俺の精液を零すなよ。全部飲むんだ。さつきも言った通り、零したら今回の話はなしだ」

が、女騎士には白濁液を吐くことも許されない。男はニタニタと笑いながら、射精が終わってなお、猛々しく勃起した肉棒をルリアの口腔から引き抜いた。

じゅず、ぶじゅずるう……。

「うえええ……」

再び捲られる唇。そのまま口腔内の精液も吐き出してしまいそうだったが、それだけは何とか耐え抜く。肉先と口唇の間に、半透明の糸が伸びる。頬がプクツと膨らんでいた。舌で触れる口の中がぬちよぬちよとして気持ち悪い。口腔を穢されていることがよく分かる。広がる生臭さが、より一層惨めさを感じさせた。

(ま、不味い。け、汚らわしい……こ、こんなモノを……)

思わずルリアは男に対して救いを求めるような視線を向けてしまう。もしかしたら許してもらえないのではないか？ 心のどこかにそんな甘い考えを抱いていた。

しかし、男はニタニタ笑っているだけ。女騎士が白濁液を飲み干す姿を楽しみにしている表情が浮かんでいるだけだった。

「……や、やくひよくは、ま、まもりえよ……」

敬語を使うことすら忘れ、つい敵に対して向けるような言葉が出てしまう。とはいえ男も気にした様子は見せず「もちろんさ」と言って笑った。

(姫様……アゼリア様……)

心に敬愛する人の、護るべき人の姿を思い浮かべながら、女騎士はゴクリッと喉奥へと汚液を流し込む。熱液が食道を流れ落ちていく。濃すぎる液体が喉に絡み「ゲホッゲホッ」と何度も咳き込む破目に陥りながらも、必死に飲み続けた。

ゴギユッゴギユッゴギユッ！

「んえっ！ ふげっ！ うええええ……」

身体の中が穢されていく。じゆるじゆるというはしたない音が自分の耳に届いた。菌の一本一本にまで、汚液が絡みつく。気道を塞がれ、何度も咳き込みながらも、ルリアはすべての牡汁を飲み干した。

「……うふう……」

精臭交じりの息が漏れる。こんな姿に男は嬉しそうに両手を叩き「味のほうはどうだったかな？」と感想を求めてきた。

(苦い……不味いに決まってるだろ……こんなもの……)

だが、それを口に出すわけにはいかない。男の心証を悪くするわけにはいかなかった。すべてはギアガードの為に……。

何度も咳き込んでしまうルリア。しかし吐くことは許されない。バルザークの命を違えれば、必ずこの男は街の人間を殺すだろう。そういう人間であると、女騎士は直感していた。（私は護る。私はギアガードの剣だから。ど、どんな屈辱も……護る為なら……）

自分で排泄したものに顔が汚れていくのも構わず、夢中で汚液をじゅずつと嘔下しながら、耐え抜いてみせる——と心に誓う。

しかし、人々は彼女の決意になど気付かないどころか、突然汚物を舐め始めたルリアに軽蔑の視線を向けてきた。その上、

「殿下。お、俺はどうすればいいのですか!？」

最後に順番待ちをしていた男が、救いを求めるような言葉をバルザークへと向けた。これを受けた帝位継承者は「フムッ。確かに哀れだな」と考え込むような姿勢を作る。暫くそのまま固まった後、彼は素晴らしいことを思いついたというようにポンッと手を叩いた。「よし。ならばそうだな。用意した金貨は街の住民全員に等しく分けることにしよう。この女を漏らさせてしまったのは俺だからな。その上で……余ってしまった君達には、特別な任務を任せよう。そら、そこにいる牝犬を犯すんだ」

この言葉が耳に届いた刹那、ルリアは舌の動きを止め、全身を硬直させる。

（な、何を言ってる？ 何を……）

が、そこに「やめるんじゃない。掃除を続けろ」というゲベルスの言葉が飛び、女騎士は再びピチャピチャと音を立てて白濁液を舐め始めた。

焦燥が心に募っていく。ドクドクと心臓が早鐘のように鳴り響き、不安感ばかりが大きくなっていった。

そんな心理状態のまま犬のような姿勢で汚物を舐めていると、どうしても腰が振れてしまふ。スカートのスリットから汚物に塗れた太股が覗く。妖しく濡れる肌。それを見た男はゴクッと唾を飲んだ。

「ほ、本当にいいんですか？ み、ミスティア様を犯せて、金も？」

「ああ、そうだ」

欲望に塗れた男に、バルザークが頷く。これを受け、男は何の躊躇もなくズボンを下ろした。

剥き出しになる肉棒。先程までのルリアの痴態を見た上、これからやろうとしていることに興奮しているのか、既に痛々しいまでに勃起している。そのまま男はルリアへと近付いてくると、何の躊躇もなくスカートを捲り上げた。

「み、みふなっ！ んげほっ！」

男に対する嫌悪感で、プツプツと鳥肌が立つ。ただ、そんな状況でもルリアは律儀に白濁液を舐め続けていた。

「み、ミスティア様のここ——もう濡れています。ほ、本当に貴女は変態なんですね」

「ち、ちがっふ！」

否定をするものの、騎士の陰部は愛液で濡れそぼっている。媚肉はぐしよぐしよに濡れ、

肉壁は淫らにうねっていた。牡を求める発情した牝の生殖器がそこにある。最早何の準備もいらぬ。

男は何の前戯もすることなく肉先を膣口に擦りつけると、そのまま容赦なく挿入してきた。じゅぐつ！　ぐじゅじゅぐつ！

「んああっ！　は、挿入はいしてくつる！　んおつ！　おつき、ひきいっ！」

犬には犯されたものの、初めて迎え入れる人間のペニス。そのサイズは犬の比ではなかった。膣内部に激しい圧迫感加わる。そして男はすぐにピストン運動を始めた。

「す、すげえっ！　ミスティア様のマ○コ……め、滅茶苦茶絡んでくる。うあ、なんていやらしいんだ」

容赦なく膣奥を肉亀頭が突いてくる。

「んひっんひっんひっ！　や、やめつろ！　んはあっんはあっ！　う、動くなあっ！」

熱い人間の肉棒が膣壁を何度も摩擦した。そのたびに脈打つような律動が胎内から全身に広がっていく。思考は肉悦に埋め尽くされ、何度も視界が明滅した。性の快楽を覚え込まされてしまった肉体は、ルリアの理性など無視して牡の侵入を受け入れていく。

（違うっ！　感じないっ！　こんなことで私は感じな……ど……んんんっ！）

あまりに無力だった。肉壁は自分を犯すペニスに絡みつき、子種を搾り取ろうとキュウッと肉壁を収縮させる。途端に男の表情はグニヤリと快楽に歪み、挿入された肉棒は膨張し、何度も膨れ上がった。そして――

「おあつ！ す、すげえ締めつけだ。も、もうもたねえ！」

と言うなりすぐにドビユドビユと射精を始める。熱液が膣内部に広がっていった。

「んあつ！ で、射精てる！ わ、私の膣中で熱いのが！ に、妊娠する。んひいっ！」

子宮に染み込むような感触。それだけでルリアは簡単に達してしまった。ただ、同時に膣内射精の意味を悟り、何度も首を横に振る。勿論、今更そんな悲鳴を上げたところで何の抑止力にもならないのだが……。

じゅぽっ！

「……おふっ……」

肉棒が引き抜かれると、ビュルツと白濁液が噴き出した。これが汚物と混ぜてしまう。「おいおい、量が増えちゃったなあ。早く舐め取らんと更に増えてしまうぞ」

このバルザークの言葉に兵士達が笑う。一体何を言っているのかと、朦朧とする頭に疑問を浮かべた途端――

「んあつ！ ま、まった……はひっはひいっ！」

ブジュボツと再び肉棒が挿入された。先程の男とは違う。新たな男がルリアを犯す。

「す、すすす凄いです！ た、たまらない！ ミステリア様とやれるなんてっ！」

敵ではない。自分を犯しているのは、間違いなく街の住人だった。

「ここからは街の男達の相手をしてもらうぞ契約の騎士。彼ら全員を満足させてやるんだ。勿論、汚物の掃除も忘れるなよ」

再びルリアの後ろに列ができる。並ぶのはハアハアと荒い息を吐き、目を血走らせた男達だった。そのうちの何人かとは、会話を交わしたこともある。その時彼らがルリアに向けてきたのは、尊敬と憧れの視線だった。しかし、現在の彼らからは微塵もそれが感じられない。ひたすら女騎士を犯すことだけを考えているように見えた。

ぶじゅぽつぶじゅぽつぶじゅぽつ！

「……へあつへあつへあつ……んほおつ！ うえつ！ うげえつ！」

びゅぐびゅぐと再び白濁液を注がれる。既にルリアの膣中には数十人分の白濁液が溜まっていた。

射精を受けるたび、女騎士は絶頂に至る。そのたびに、飲んだ汚物を吐き出していた。既に口周りは汚液に塗れてグシャグシャになってしまっている。たつぷりと精液を注がれた膣口は開ききり、肉髪が外側に捲れ上がってしまった。男達は膣中に注ぎ込むだけではなく、女騎士の身体にまで白濁液を降りかける。最早全身がドロドロに汚れていた。美しい金髪は乾いた白濁液で固まっている。服に染み込む精液。身体中にベッタリと張りついた粘液を重いとまで感じてしまう。

「間拔けな姿だな。しかし……契約の騎士とは本当に律儀なものだ」

バルザークの声が酷く遠く聞こえた。すぐ近くで話している筈なのに、まるで夢の中のようでもある。

ルリアは背後から犯されたまま、ひたすら地面の汚物を舐め取り続けた。

ずる、じゅずる。ぶじゅるるる。ぐじゅるう……。んぐちゅ、んぐちゅ……。

ネチャネチャとした山芋でも啜っているかのような姿。最早腰を立てるだけの力も残っていない。白濁の海にうつ伏せに寝転がりながら、ひたすら女騎士は汚液を飲んでいく。

(まもりゅ。わらひがまもりゅんだ……)

街の人間を護りたい。その一念だけが彼女を動かし続けていた。だが、そんな彼女を見つめる人々の視線は冷たい。まるで汚物を見るかのような視線。そんな視線を向けてくる者の中には、散々ルリアを犯した男達も混ざっていた。

「最低だな。まさか契約の騎士がこんな淫売とは思ひもしなかったよ」

「幻滅だ。もうギアガードも終わりだな」

住人達は口々に呟きながら、広場から立ち去っていく。汚いものなど見ていたくない。彼らの後姿がそう語っていた。

それでも、残された女騎士は舌を動かし続ける。蜜壺を犯され、ブピッブピッと開ききった尻からはしたない音を響かせながら……。

*

すべての掃除が終わったのは、すっかり日も落ちてしまった頃のことだった。空には星一つないくらい闇が広がる。ルリアを見張る兵士が掲げる松明の灯りだけが、空しく周囲を照らし出していた。



「漸く終わつたか。しかし……酷い臭いの上、酷い姿だな……」

汚物を舐め取り終え、ルリアは呆然と地面に座り込む。下腹部は大量の汚物を飲んだせいで、またポッコリと膨らんでいた。口周りはグチャグチャに汚れている。ひーはひーはと漏れる息が、あまりにも惨めだった。

そんなルリアの姿を笑いながら、バルザークが声をかけてくる。

「しかしどうだ。俺に仕える気になったか？ 街の人間はお前を裏切ったんだぞ……」

裏切り——この言葉を聞いた途端、呆然としていたルリアの眉間に皺が寄った。

違うと否定しなかった。だが、散々街の人間に辱められた事実は消えない。穢された身体は元には戻らない。

「それに……俺に従わなければ、更にお前には躰をしなければならなくなる。お前は耐えられるのか？ それともまだ躰を受けたいのか？」

心の隙間に入り込んでくるかのような言葉。弱った心にその言葉は、とても甘美なもののように響いた。しかし、ルリアは、契約の騎士は鋭い視線を敵に返す。

「だ、誰が……うぶっ……き、貴様などに仕えるか……」

街の人間には裏切られたかも知れない。ただ、だからといってギアガードは裏切れない。国には共に戦った仲間がいる。自分を待っていてくれる人がいる。その信頼を裏切ることはいできない。

「た、たとえ……だ、誰に裏切られても……私は自分を裏切らない……」

敵に対する宣戦布告だった。これを聞いたバルザークは嬉しそうに鼻を鳴らす。

「なるほど。よく分かった。これからが楽しみだよ」

そしてバルザークは徐に自分のズボンを脱いだ。

「では早速だが、口奉仕を頼むよ……。いいか、全部飲めよ」

ルリアはそんな姿を見つめて拳を一度握り締めた後、敵のペニスを咥えた。平静であれば嘔み千切っていたかも知れない。しかし、今のルリアにそんな力も、思考力も存在しなかった。無心で口に含み、舐め、しゃぶる。肉竿に舌を絡め、頬を窄めて激しく吸った。

じゅずっじゅずっじゅずずず。くちゅ、ぶくちゅ……。

「んふっ！ ふっふっふ、ふううう……んふっ！」

女騎士に対する陵辱劇に興奮していたのか、すぐに男の肉棒は口腔内で硬度を上げる。

「ふふ、今日のお前は本当に淫乱な牝だった。不覚にも興奮したぞ。ほら、ご褒美だ！」
肉先が破裂しそうな程に膨らみ、射精が始まった。

ぶびゅぼっ！ どびゅっどびゅっどびゅうっ！

「んおっ！ ふぐっ！ うぐっ！ んもおっ！」

喉奥に直接放たれた熱液が、食道を通って胃の中へと流れ込んでいく。先程たっぷり飲まされた汚液でもたれた内臓に、更なる牡汁が混ざっていく。本当ならばすぐにでも吐き出したい。が、敵の命令に逆らえば、街の人間の命はない。必死にルリアは白濁液を飲み続けた。

(ど、どうということなの?)

そして気付く。

(なに……この味は?)

生まれたのは困惑だった。思考は乱れ、何度も落ち着きなく視線を左右に走らせる。

(ど、どうして? なんで……お、美味しい?)

それは今まで飲まされてきた白濁液とは確実に違う味だった。苦味も臭みもある。だと
いうのに、何故か口腔に甘美な味が広がっていく。思わず問いかけるような視線をバルザ
ークへと向けると、彼のニヤケ面が映った。

「……気付いたか? これはな、俺から頑張ったお前に対するご褒美だ。俺の精液には術
をかけてあるんだ。これを飲んだ女が美味いと感じる術をな。くく、これからお前の食事
は三食このザーメンになるんだからな。たっぷり味わえよ」

三食白濁液——聞いただけで絶望感すら覚える。心中がざわめき、不安感が大きくなる。
だが、それはすぐに掻き消えていった。汚液の味が、身体中に染み込んでいく。

「んん。ふぐ……んむう……」

屈辱的な筈だというのに、口腔内で舌を動かし、たっぷりと精液を味わってしまう。そ
れでも——

(私は……私は負けない。負けるものか……)

ルリアの瞳は未だに死んではいなかった。

射精をしたというのに、膣中の肉棒はまるで萎える気配を見せなかった。それどころか、より熱気と硬度を増していく。

アゼリアを犯す。ペニスで無茶苦茶にして、ザーメンをたっぷり流し込む。

一度決壊してしまったルリアの心は、獣の本能を剥き出しにするのみだった。悲鳴を上げる主を無視し、ピストン運動を開始する。女騎士は表情を淫蕩なまでに蕩かすと、腰を振りつつ、ドレスの上からアゼリアの胸を舐め回し始めた。

じゅぶんじゅぶんじゅぶんっ！

「や、だつめ！ ぬい、抜いて！ ルリアアッ！ 抜いてよ！ お願いだから！ こわれつつやう！ んはっんはっんはあつ！ わつたしのお腹壊れちゃうからあつ！ やらっ！ こんなやらよおっ！ 姉さんっ！」

巨棒が抜き挿しされるたび、幼い陰部が捲れ返る。ピンク色の汚れを知らない媚肉が、痛々しいまでに外側にピロンッと伸びた。白濁液と破瓜の血が混ざり合ったものが流れ落ちる。

「だめれふ……んちゅ、んはあはあ……もつと、もつとアゼリア様で気持ちよく。気持ちよくなるのっ！ んちゅ、ふちゅ……柔らかい。姫様のおっぱい柔らかい……」

伸ばした舌を蛇のように動かしながら、腰を振りつつドレスの乳頭部を唾液でベトベトにする。ドレス生地が透け、豆のように小さく控えめなアゼリアの勃起乳首がルリアの視界に映った。

ちゅぶっ！　ちゅくっちゅくっ！

「んひっんひっ！」

乳先をツンツンと舌で突き、軽く噛む。そのたびに電流でも走ったかのように、少女の小柄な身体がビクビクと震えた。コレに連動するように、たっぷり白濁液が詰まった蜜壺も収縮する。ただでさえ押し潰されるのではないか——とすら思ってしまう程の締めつけだったものが、更に強くなっていく。

ペニスというにはあまりに刺激に弱すぎる陵辱棒は、ただそれだけで再び絶頂に向かつて膨れ上がった。

「ま、まった！　おっおっおっ！　で、射精^でるっ！　また射精^でますっ！　姫様のマ○コに、私のチンコからビュービューセーシが射精^でますっ！　ほっほっほおっ！」

ぱじゅんぱじゅんぱじゅん——と音を響かせながらルリアはへこへこ腰を動かし続け、やがて子宮口すら貫き、直接子宮内部へと肉棒を挿し入れた。

「んあっ！　あっあっあああっ！」

アゼリアが打ち上げられた魚のようにパクパク口を動かす。瞬間——

「あへっ！　また、まらでりゅっ！　で、射精^でるっ！　マ○コの中に射精^だすのおっ！」

ぶびゆるばあっ！　じゅぶばっ！　ぶばっぶばっ、どっびゆるるるっ！

再びの射精が始まった。

「お……お——お——」

視界が真っ白に染まった。子宮内直接射精の快楽に、ルリアもミステイアは溺れる。二度目だというのに、射精量は一回目のそれさえも上回っているようだった。

「おおっ！ かはっ！ ひ——ひ——ひ——！ も、もほっ！ 無理！ ほ、本当にむっりいっ！ る、りあっ！ た、たすけへっ！ ゆるひてえっ！」

更に膨れ上がる腹。そのままの状態でジュブボツと肉棒を引き抜くと、失禁でもしたかのように、ぽっかりと開いた膣口から白濁液が逆流する。アゼリアの白い肌は真っ赤に染まっていた。匂い立つような女の香りが、辺りに漂う。

「んへあっ！ あ……あ……あ……あ……」

床に広がる白濁の海。しかし、ルリアのペニスは未だ勃起している。もつと犯したい。我慢などできない——女騎士の思考は肉欲に浸りきっていた。

自分が辱められたのと同じように、アゼリアを無茶苦茶にしたい。ただそれだけを考え、床に転がったままヒクヒク震えている姫の身体をうつ伏せに寝かすと、今度は背後から主人に肉棒を挿し入れた。

じゅぶずっ！ ぐじゅじゅじゅっ！

「やっ！ もうやっ！ やなの、嫌なおっ！ ひ、んいいいいっ！」

挿入が始まると同時に、アゼリアは床を這って逃げようとする。だがルリアは逃がすまいと彼女の腰を押さえ、そのまま容赦なく妹姫を犯した。

「あええええ……」

ブルブルッとルリアが甘く震えるたび、多量の腔内射精が行なわれる。アゼリアを犯し始めてから、一体何度目の射精なのか？ それさえも分らない程に、女騎士は何度も何度も主人の腔中に精を放ち続けていた。まるで自分に与えられた玩具のように。

射精するのは何も少女の蜜壺だけではない。彼女の口に無理矢理ペニスを咥えさせて口腔陵辱もしたし、大きな乳房でのパイズリも行なった。

「んげろっ！ うげ、ふげえええ……」

胸で射精された白濁液が、アゼリアの顔にパツクのようにベッタリと張りつく。息が苦しくなったのか、姫は何度も咳き込んだ。そのたびに、口腔にたっぷり流し込んだ精液が吐き出される。

「綺麗。姫様とても綺麗です……んちゅ、んんん……」

ちゅく、ぶちゅく……ちゅずずう……。

そんなアゼリアの顔にルリアは舌を這わせると、自ら撃ち放った白濁液を舌で舐め取り始めた。ザーメンを見ると、どうしてもあの味を思い出してしまふからだ。しかし、舐めたところで、バルザークの味には遠く及ばない。ただ苦くて、喉に絡まるだけの汁ではない。

あの味が欲しい。たっぷり飲んで、女としての絶頂を味わいたい……。

アゼリアを犯せば犯す程、その欲求が強まっていく。男ではなく、女としての絶頂に至

りたかった。だからルリアは姫を陵辱しつつ、自ら指で自身の蜜壺、陰核を刺激し続けたのだが、結局イクことはできなかった。それを誤魔化す為に、更にアゼリアを穢す。

ずちっ！ ずちちちっ！

「——そ、しょこつはあつ！ や、やめへ！ やめなはいっ！ リュリアひやめてえっ！」
ぽっかり開いたままの膣口を無視し、肉棒を背後から小さく窄んだ菊座に密着させると、そのまま挿入を開始した。

「おほっ！ し、しまつる！ 凄く締まるうっ！」

膣とは比べ物にならない程、少女の直腸は狭い。挿入^いただけで——

びゅぶぶっ！ びゅぽおっ！

「でふ、しえーしでりゅうっ！」

簡単に達してしまう。何度射精しても収まらない肉棒。女騎士は射精しつつ、腰を振り始める。少女の苦しみなどお構いなしに、自分が気持ちよくなることだけを考えていた。犯して犯して犯し尽くして、気持ちよくなりたい。気持ちよければそれでいい。他には何もいらぬ。気持ちよくさせてくれるのであれば、どんなことだってする。どんな命令だって果たしてみせる。

快楽へと忠義の心が傾いていく。

「ひは——ひは——くひっ！ お、おしりっは駄目！ 駄目なのっ！ ひっひっひぎっ！
な、なっに？ の、のびってる！ お、お尻の中で伸びってる！」

傾く心に合わせるように、腸内の肉棒が変化を始めた。

「んあああつ！ ひいつ！ おつきくなる！ チンコが大きくなるつ！ あつあつ！」

腰を振るたびに、ペニスが触手のように伸び始めた。グネグネと蛇のように蠢きながら、姫の腸奥へと進んでいく。射精をしつつ、排泄器官を逆流していく肉棒。長さが増せば増す程、肉茎自体も敏感になっていくようだった。

ドレスの上からでも、下腹部を触手が這いずっていくのが分かる。

「んえつ！ んええつ！ あ——かあああ……」

息が詰まる程の苦しみを感じているのか、苦しみの呻きのような嬌声をアゼリアは上げた。爪を立て、何度も床を搔く。

ルリアはそんな姫の様子を気にかけてようとしめない。より大きな快楽を得る為に、触手を更に膣奥へと伸ばす為に、ピストン速度を上げていった。

じゅぎゅる、ぶじゅじゅずう……。

「あへあへへへ、あへへへへへ」

色に狂った女騎士は口元に笑みを浮かべる。

(犯したい。犯されたい。犯したい。犯されたい。犯したい犯されたい犯されたい犯したい犯されたい……)

二つの欲求が女騎士を苛む。最早本能のみがルリアの肉体を支配していた。敬愛する姫を犯すことに何の躊躇いもない。いや、愛しているからこそ、より肉体を求めてしまう。

そんな強い想いのせいなのか、肉体も変化を始めた。

じゅぐぼっ！ ぶじゅぐるうっ！

「んあっ！ んおおっ！ んひ——ひきいっ！」

肉棒の付け根が二つに分かれる。二本になるペニス。それが膣中にまで挿入される。

じゅぎゅぼおっ！ ぼっびゆるう！

「くへっ！ あひひひひ……」

「あひいっ！ しゅご、しゅごすぎるっ！ あひっひっひっひ——！」

肉棒が二本になった分、快楽も二倍になった。当然アゼリアの苦しみも二倍となる。この状態で更に触手は枝分かれしていく。

肉紐は数十本にまで分岐し、姫君の全身を這いずり始めた。腰を締め上げ、乳房を搾る。闘技場でルリアが受けた陵辱を再現しているかのようにさえ見えた。

触手に搾られ、形が変わる乳房。痛々しいまでに乳頭は勃起している。口腔にも肉棒を突き込まれ、王女は「んごっ！ ほごごっ！」と苦しげな喘ぎ声を漏らした。

「きもひいでふ。ひめしやまのからだきもひいでふうっ！」

触手と姫の身体が擦れあう。肉紐と一体化した肉体は、まるで全身の快楽神経が剥き出しになってしまっているのではないかと思ってしまう程に愉悦を感じていた。玩具のようにアゼリアを扱うことに罪悪感すら覚えない。細い触手が姫の陰核を縛る。

「んひっ！ ひんんっ！ んんんっ」

姫の身体は一瞬硬直し、蜜壺の締りが激しさを増す。ピュピュッと愛液が結合部から飛び散った。生温かい姫の汁を感じ、女騎士はだらしなく眈を落とす。潮吹きを受ける心地好さに、ルリアは更に表情を歪めると、二本三本と自らの意思で触手を増やし、姫の膣口へと挿入した。

じゅずず、ぶじゅずう……。

アゼリアが言葉にならない悲鳴を漏らす。その様が女騎士にはとても可愛らしいものと思えた。

（姫様可愛い。気持ちいい）

考えるだけで肉感が高まっていく。もっと犯したい。もっとアゼリアを無茶苦茶にした。それだけしか考えられなかった。

燃えてしまうのではないかと思ってしまう程に全身が熱い。肉触手はその先端部を風船のように膨らませていた。

「やら……もっほ、もほやむえて……」

今にも気絶しそうな声でアゼリアが懇願してくる。向けられる瞳に許しを請うような色が現れていた。同時に「お願い。元に戻って」という声が聞こえるような気がした。

が、壊されてしまった女騎士の心は戻ることはない。それどころか、姫のそんな姿に騎士はより興奮し、触手による蹂躪をより激しいものへと変えていく。

せた。

「あへ、あへへへ……ひへえ……」

だが、それでも肉体の疼きは収まらない。いや、確かに牡の部分では満足することができたし、これ以上ないというくらい肉悦を知ることができた。しかし、それと比例するようにルリアの牝が疼き出す。

膣道が痺れ、子宮が律動する。犯して欲しい。気持ちよくして欲しい。本能が叫び声を上げているかのようにだった。

じゅぐつ！ ぶじゅぐつ！ じゅずろろお……。

「あかつ！ ふひ——ふひ——」

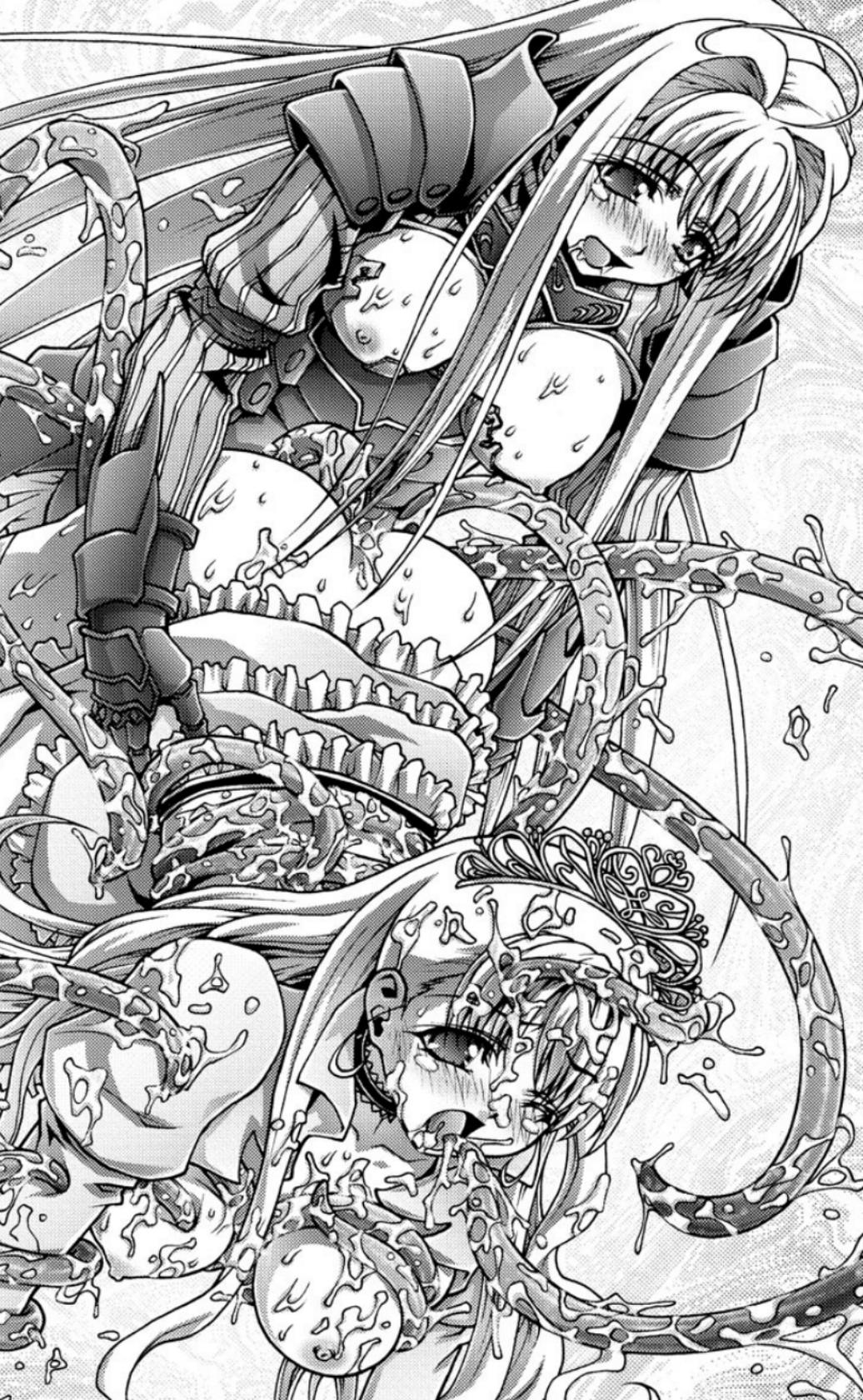
女の発情と同時に、股間部から触手が抜け落ちる。アゼリアに絡みついていた触手は、そのまま全体を白濁液と変え、溶け消えた。

「んあ……あ……あああ……」

残ったのは、膣口、肛門、口をぼっかりと開けた王女だけ。汚れを知らなかった姫君が、ドロドロに穢れた姿を晒していた。

「まったく酷いものだ」

それまで姿を消していたバルザークが戻ってきて口を開く。彼は溜息混じりにアゼリアの姿を見つめながらフウツと肩を落とすと、やはり身に着けた服を白濁に塗れさせた金髪の女騎士へと視線を向けてきた。



ルリアは彼の視線に気付くと、まるで餌を求める家畜のように何かを期待するような表情を浮かべる。騎士としての矜持など微塵も残っていないようだった。

「辛いのか？ 契約の騎士よ」

静かに敵は口を開く。これに対して女騎士は何度も首を縦に振った。

「そうか……。いいだろう。俺がたつぷりイカせてやる。ただし、一つだけ条件がある」

一度バルザークは言葉を切ると、床に倒れ伏すアゼリアへと視線を向ける。

「そこに転がっている姫様との契約は今日限りだ。これからお前は俺の契約の騎士となる。それが条件だ」

ニタアツとバルザークの口元が歪む。

「な、なにをひつてる……。る、ルリアは……。はあはあ……。ルリアはわたひの……」

これには、ルリアではなくアゼリアが驚く。全身を白濁塗れにしながら、驚愕に瞳を見開いた。

「私の契約の騎士——か？ こんな酷い目に遭わされてもまだそんなことが言えるのか？ ルリア……ミスティアはお前を犯したんだぞ」

少しだけ男は感心しているようだった。犯されても自分の姉を信じる姫君の姿に、暗い情欲を燃やしているようにさえ見える。

「あ、あたりまへ……。よ……。る、りゆりあは……。わたひの、わたひの……」

ルリアの耳にも妹の声は届いた。長年一緒に暮らしてきた家族であるからこそ、アゼリ

アの言葉が本気であると分かる。その気持ちは本当に嬉しい。できることなら、自分が傷つき倒れるまで、永遠に彼女を護っていたかった。

(……でも)

ルリアは悲しそうな視線をアゼリアへと向ける。

「姫様……」

女騎士の紅い瞳は潤んでいた。本当に悲しそうな光を灯している。

「い、いやっ！ 駄目っ！ や、やだっ！ やだよ！ 姉さん！ 姉さんっ！」

視線を向けられた途端、王女は悲鳴を上げた。犯された時以上の悲鳴。今にも死んでしまいそうな程に、悲痛な声だった。

アゼリアの声を聞くだけで、胸が張り裂けそうな程の辛さを感じる。それでもルリアは王女に背を向ける。最早耐えられない。身体が、心が持たない。

「……ごめんなさい」

結局言えたのは、たった一言だけ。その言葉は、家臣としてではなく、家族として、姉としての最後の言葉――。

そのままゆっくりとバルザークの前に跪く。紅い瞳からは、自然と涙が零れ落ちた。

「一言だけ言っておくわよ。私より先に死ぬことなんて絶対に許さないんだから」

『ルリアは私の騎士なんだから、私の言葉だけ聞いていればいいの。勿論父上の命令だつて大事だけど。貴女は私のものなんだからね』

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>